

公開研究会 大戸川ダムの土砂堆積問題を考えるー最上小国川の穴あきダムから学ぶー
2023年11月19日 9:00-13:00 龍谷大学瀬田学舎1号館619室（オンライン併用）

総合討論

元淀川河川事務所 所長・元淀川流域委員会 委員長 宮本 博司
参議院議員・前滋賀県知事 嘉田 由紀子
(発言順)

宮本：昔、私が20代の頃から、天ヶ瀬ダムと大戸川ダムと瀬田川洗堰は本当に難しい関係で、ずっと検討をし続けてきたんです。それから30代・40代になっても、天ヶ瀬ダム再開発というものの、仕組みがさっぱりわからなかった。それほどの近畿地整にとっては懸案の設定だったのです。今の話で、天ヶ瀬ダムの予備放流を行うために大戸川ダムが必要だった、それもあったと思います。

ただね、私らも、ご存知の通り2005年に大戸川ダムを中止しますとはっきり言って、当面実施しないというのは、文章上ああったのですが、実質的には、本省の河川局長も含めて、大戸川ダム中止しますという決定を承諾したんですよ。

その時に、私は近畿地整の河川部長だったんですけど、大戸川ダムの事務所長（脇坂氏）は河川屋ではないんです。地質屋であつたので、要するに河川に対するこだわりがないです。本当に優秀な人だったんです。その事務所長が私に、「宮本部長。どんなことを考えても大戸川ダムはいりません」と言うて来たんです。私もその結果分かったし、そうだろうと。それを受けて、我々は本省に乗り込んで、最終的には本省の河川局長まで、近畿地整の意見として大戸川ダムは中止ですという話で、OKになったという経緯があるんですよ。

そういう経緯があつて、それから今本先生が今おっしゃったように紆余曲折があつて、現在順調に建設に向けて進んでいるというの

は非常に私も忸怩たるものがあります。そんなことで、今日、いろんな話を聞かせてもらいました。

私は河川の事についてずっとやってきて、ちょうど嘉田さんが知事の時に、橋下さんと嘉田さんとで大戸川ダムが要らないと言われて。それから民主党の政権交代がありました。これは絶好のチャンスだと。これからの河川行政を変えるのに絶好のチャンスだと思ったんですけども、その直後に、大変私にとってはショックなことがありまして。それからはっきり言うと、やる気なくしまして、河川のことはもういいわという話になって、小さな京都の中小企業の経営に邁進してきたわけであります。今日は本当に久しぶりにいろんな専門家の方々の意見を聞いて、大分頭が元に戻ってきている感じがあるんですけども。そこで、いろんなことに気づいてお話ししたいと思うんですけども。

まず、穴あきダムと流水型ダムというのはイコールじゃないです。これを混乱させて、わざとか知らないけども、使ってるんですよ。角さんの論文を見ても、穴あきダムイコール流水型ダムみたいになってるんです。先ほど大熊先生が配られた資料の流水型ダムの表の中に、「洪水調節用ゲート等」という欄があつて「無」と「有」となっている。洪水調節用ゲートがなくて、いわゆる自然調節方式、これが“穴あきダム”なんですよ。一方、“流水型ダム”というのは、その穴を、現在の河道のところに同じ位置で開けるというものです。ですか

ら、流水型ダムであっても、穴あきダムもあれば、ゲート付きのダムもあるということなので。そこで混乱すると議論がややこしくなるなと思います。

もう一つ、先ほど川辺先生のお話を聞いてたんですけども、この流水型ダムというのは、実は私が開発課の専門官であった1995、6年頃に、こういうダムを作ったら、いわばすごくダムの負荷が軽減されていいんじゃないか、という話を開発課の中で議論してたんです。しかしその時には、これをやったところで、結局、ダムで堆砂するよと、砂は溜まるよということでやらなかったです。それを今やろうとしているわけで、何かこの流水型ダムを作れば元の河川の状況が維持できるかなのようなことを言っているというふうに聞こえるんですけども。これ、国交省も、そんな元の河川の状況になるよとは絶対思っていない。すでに私らが1995年頃に議論した時に、いや、こんなのやったところでどっちみち砂が溜まるよ、という話が分かっているんですよ。

で、なおかつ、さっきの小国川ダムは流水型ダムだと言うんだけど、きちんと堆砂容量を見込んでるわけです。ということは、必ず砂が溜まりますということを、もともと計画に織り込んでいるということなんです。

もう一つ、流水型ダムをやったところで砂が溜まるじゃないですかと言っても、国交省はおそらくこう言います。ダムはもともと治水に要ります。ただし、通常の貯水ダムだったら堆砂が激しいので、河川に影響が大きくなります。この流水型ダムにするとかなり軽減できます。決して砂が溜まらないとは言いませんが、かなり軽減されます。だからいいんです、ということを使うと思うんです。

砂が溜まるからダメだと、環境を悪くするじゃないかと問うたところで、国交省はそれは分かっていますよと言うと思います。というのが、私の感じだったところでもあります。

それから、今本先生の資料は、かなり私が忘れていたことを思い出させて非常に気分が悪いんですが、国交省の計画論というのは、はっきり言って、今、川から離れて一住民とし

て見た場合に、全くのフィクションです。川というのは、水が重力で流れてきて集まって流れていくと、周りに人がいると、一気に流れる水で被害が生じると。まさにそれが、自然と人間との営みの実態なんですよ。そういう実態に対する対策を、机上のフィクションでやろうとしているところが全くおかしいな、と私は思っています。

それで、今日の会議に出る前に嘉田さんに、大戸川ダムは河川整備計画もできてもう動いているじゃないですかと、なぜ今こんな勉強会に私みたいな人間が行かなあかんのですか、ということをやったんですよ。嘉田さんは、整備計画ができていてもそれは政治上の話であって、まだまだこれからひっくり返して、できることがあると。これがまさに政治の力なんだとおっしゃって。それでは分かりましたと、それなら私も行かせてもらって、意見を言わせてもらいますと来たんです。

それで、嘉田さんにお話ししてもらいたんですけど、確かに政治の力があるんですよ。ただね、私が本当に煮湯を飲まれた2009年の秋の話になるとですね、せつかくの政権交代をしても、結局は全部腰砕けだったんですよ。かえって悪くなったんですよ。それまでダムについて批判していた民主党が、その後政権にとった後に、ダムを全部お墨付きしたわけです。批判した人がお墨付きするほど強いお墨付きはないんですね。だから、はっきりとそこは、がっかり来てるんですけど。

本当にですね、政治の力で今の状況が変えられるのかということなんです。本当、私が議論したいのはそこなんですよ。もし仮にですね、政権交代の次があったとしてもね、今の政治家の皆さん方が、本当に今の河川の在り方、治水の在り方がおかしいと、そこまで本当に勉強されて実感されている人がどれだけおられるんですか。そこまでの覚悟がないと、私はいくら政権交代したって、また2009年の二の舞になるんじゃないかな、という気はしています。

そんな中で、どこまでの覚悟が政治家の人に必要かというと、私は先程大熊先生が紹介

された大熊先生の論文、これを読ましてもらって、私は本当にここがすごくスッと入ってきて、まさにその通りだと私は思っています。ただし、このような発想というのは、今の一般的な世の中の大半の人、あるいはトップに立っている人たちは、こういう考え方を持っていないと思うんです。

はからずも大熊先生は、これはもう、小さい子供たちにこの花の名前は何か、その辺からやっていかないと変わっていかないと最終的には言うておられる。私も実はそんな気がしていて、ここを必死になってどうやって変えるのかということをやらない限り、単に今の状況で政権交代があったとしても、私は非常に厳しいという気がしています。

そこを、我々もそんなに先がないんですけれども、これから次の若い世代にどうしてこの問題を引き継いで、こういう大熊先生のおっしゃっているような、まさに価値観の転換みたいな話をしていくのかというところを、この方向づけをしていくことが我々の残された使命じゃないかな、というふうに思っております。

好き勝手なことを言いましたけれども、今日こうやって出させてもらっての考え方は、そんな思いであります。できたら嘉田さんに、それを受けて政治家の嘉田はこうしますというコメントをお願いします。

嘉田：ご指名をいただきました。オンラインの皆さんも聞いておられると思います。宮本さんにお伝えしたことは、まずは科学的データはそれはそれで積み上げなくてはいけません。今回は最上小国川をみせていただいて、地元の研究者がこのダムのところをやっているのが本当にすごいので、それで川辺さんにお話を伺いたい、と申し上げました。

それと2つ目の行政の問題は、もういつも今本さんが言うておられたように、本当に定量治水自体が問題なんだと。水量だけで川の安全性を担保できるのかということで、皆さんに協力いただいて球磨川の調査をし、命を守る河川データはどうあるべきなのか。球磨川

で50人の溺死者を1人ずつフォローさせていたでいて、もし川辺川ダムが上流にできていたとしても、50人のうち、命を救えた川沿いにギリギリに住んでいらっしゃった方は2人だろうと推測をし、そして命を守るためには、単なる水量の問題じゃないと。定量治水、どうするか。

これは国土交通委員会でも、問題提起しております。でも、ほとんど多分分かってくれません。斉藤（鉄夫）大臣も命を守るためには水量計算が必要だと言っておりますので、行政的にここは本当に手続きとして難しいんですけど。例えば、それこそ河川法の逐条解説なんて、すべて水量基本ですからね。だから、これは明治29年以降、日本の近代政策の中で、本当に180度の変換が必要だと、これはこれで主張している。

3点目の政治です。そもそも私が知事選挙に出させてもらったのも。淀川水系流域委員会では、宮本さんが河川部長で、そして今本さんはじめ、あの時に現場の視察と会議も入れて400回議論した。あんなに徹底的に川のことを議論した委員会はなかったと思うんです。そして、2005年7月1日に結論を出した。

ただ、その1週間以内に、あのとき2つ対象となっていた大戸川ダムと丹生ダムを抱える滋賀県の國松知事は、それは必要だと言ってひっくり返す。滋賀県からたくさん出ている委員に意見も聞かずに。知事の一言で一気に推進に変わる。これは自分が政治家やるしかない。それで、かなり覚悟して2006年の知事選挙に出させてもらった。

その数ヶ月前に宮本さんが国交省を辞めるとおっしゃったので、あれは本当にショックでした。1月1日に決意をした時は、宮本さんはまだ国にいてくれると思ったんです。ところが選挙近くなって、6月かしら、もう辞めますって。これ、片腕を失ったような感じでした。

でも結果的には、2006年7月2日の選挙で、ダム以上に新幹線の問題だったと思うんですけど、税金の無駄遣いはもったいないで、県民の皆さんが嘉田を選んでいただいて。で、

そのあとどうするか。ちょっと思い出になってしまうんですけど、2007年12月24日のクリスマスの日に、県の若手の職員と今本さんの自宅に行って、それでこのダムを止める方策どうするかと言ったときに、ここは山田知事とそれから、2007年11月にはもう太田知事がやめるだろうという観測があったので、太田さんの次の知事（まだ誰か分かりませんでした）に呼びかけて、この上下流の3知事で、ダム問題をやるんだと。2008年2月に橋下さんが知事になり、話ができる人だと言うので、2008年4月8日に3知事が淀川水系流域委員会に話を聞くと。そのときの淀川水系流域委員会の委員長が宮本さんで、そしてこっちは3知事、それと国交省と、こう三極構造で。結果的には、2008年4月8日のあの会議から、8月には山田・橋下両知事に琵琶湖に来てもらって、3知事で連携しましょうと。そのときに、山田さんが、嘉田さんは立場が難しいから僕から言いますというので、山田さんが中川博次さんをキャップにして、大戸川ダムの必要性は低いんだということを、京都府の委員会から言わせてもらって。それをもとにして、10月8日に3知事で、そして11月11日には三重県も入って4知事合意で、ここに書いていただいているように整備計画に位置づける必要はないというところに流れてきて。これはまさに、日本の河川政策上、前例のないことです。府県を超えて上下流の知事が国に対してダムの必要性を整備計画に位置付けなくてもいいということで。私たちはかなり小躍りをしたんですが、

ところが、2009年3月30日に国の方が整備計画を出してきたときに、朝、私は宮本さんと電話しました。これ、本当に止められるんですかと。宮本さんが、いや事業を延期するというだけで、カッコの中にもう爆弾が入っているよと、宮本さんが言われて。それで気がついたんです。あ、こういう狡賢いことをするんだ。この時には金子（一義）大臣です。まだ自民党政権です。それで2009年3月、結局、時期を検討すると。それが私が知事を辞めてから、三日月さんが頼りにした整備計画

の一条なんですよ。

それで、この後ですけども、2009年3月のあと9月に政権交代をする。政権交代の時に、国土交通大臣は前原（誠司）さんですよ。ですから、今本さんは前原さんに話ができる人で、その時にダムの見直しの委員会は宮本さんを委員長にして、そして中川博次さんではダメだと、私たちは言っていたんです。結局、前原さんも官僚の中の大臣だったんですよ。だからもう、人事を言われてきたら、官僚の言われる通り。2009年10月・11月と前原さんに手紙も書き、知事としてずいぶん直訴しました。けれど、結果的には宮本さんが委員長になれずに。それはもう前原さんの判断が甘かったと思います。

それで、あの時に前原さんは、川辺川ダムもハッ場ダムも中止だと言って。確かに、それまで反対だったところを表に出すんですけど、結果的には1年後くらいに、国土大臣は馬淵（澄夫）さんになり、前田（武志）さんになり、その間にどんどん官僚さんは挽回をして。結果的には、知事が残っていましたから川辺川ダムはやめまして、しかし、ハッ場ダムは建設に転換してしまう。ハッ場ダムが転換のときのポイントは、関東地方知事会です。あの時に私は上田（清司）知事に随分言いました。これは必要性が低いと。そうしたら利水のフルプランに入っているというんですね。利水上、これ以上言えないんだよ。というのが、関東知事会のちょっと思い出話になりますけど。

それでですね、本当に政権交代しても、官僚が何とでも政治家を動かします。ですから、今私自身、宮本さんから言われて、4年前に参議院に入って、それこそ流域治水のシンポジウムとかを大熊さんにも高橋裕さんにも来ていただきながら、2回やりましたけど。残念ながら、このダムの問題を中まで理解できている国会議員は、私一人かなと。本当に、実は立憲民主党も国民民主党も、もと民主党の方たちも、そもそも興味がないので話に乗ってくれない。共産党さんはダム反対です。ずっと一貫して反対です。ただ、論理を詰めら

れることは共産党さんはこれからです。公共事業チェック議連をもう一度動かして、ようやく来週かさ来週に、一つ動いていくと思います。公共事業チェックとグリーンインフラを進める会。

子どもたちからも考えなきゃいけないのです、哲学を。というので本を持ってきたんですけど、『流域治水って何だろう』という滝さんが子ども用に作ってくれました。見ていただけますか。このあたり、子どもたちの教育のところも含めて、政治は政治で頑張ります。教育のところも含めて、本当にコンクリートで国土を固めていっていいのか。それこそ国土強靱化、これは斎藤幸平さんという現代史家が言ってますけど、惨事便乗型公共事業。ほら昔は火事場泥棒って言ってました。火事が起きました、だからこれが必要ですよ。そればっかりですよ。今すごいです、国土強靱化の流れは。永田町にいと、99%周りからそれを言われてくるんですけど。そこに対しては、政権交代を狙いますと言うのは、私たちは少数ですから、お前は未来の党みたいに失敗するだろうと言われるかもしれませんが、ここはここでじわじわと長い絵を作りながら、教育というところは進めていきたいと思っております。

時間も長い話になってしまったんですけど、かなりヨーロッパはすでにコンクリートから、あるいはアメリカもコンクリートから卒業してるわけだから、ここは10年、20年の時間の問題。

宮本さんにぜひ伺いたいんですが、ダム推進派のあの80代の国交省のドンの皆さんが引退したら、若い国交省職員さんは変わるのでしょうか、変わるのでしょうかということを、ぜひ意見をお聞きしたいんですが。

宮本：とにかくダムを作ると理屈も何ものなしに言ってる我々の大先輩たちは、かなりお亡くなりになりましたから、若い人たちへの縛りは緩くなったと思います。ただ、それがあまりに長かったものですから、強烈的な縛りとして、今の若い人たちも洗脳されておるわけ

ですよ。だから、本当にもう一度今の若い人たちとも腹を割って真剣に、未来の子どもたちのためにダムをどうするんだという話をやればいいんですけどね。どこまで彼らが殻を打ち破ってやっていこうかなと思っているかどうか、そこは非常に疑問です。前よりは重しは無くなっていると思うんですけども。

私は、国交省だけの問題じゃないと思いますよ。世の中自体がはっきり言って本当に無茶無茶になってきているじゃないですか。みんな国民全体として、大熊先生がここに書かれているように、“山川草木悉皆成仏”のような思いを持つのかどうか、それがストーンと入るのかどうか。私は、そこを何とかしていかないと、という気はしています。だから、そうなら、いろいろな人がどんどん増えていったら、国交省の若い人たちもだんだん変わっていくと思うし、そういう気はします。

今即、国交省の若い人たちが気持ちが変わって新たな治水に転換しようと、なかなかそうはなっていない。その証拠に、大戸川ダムも今作ろうとしているし、川辺川ダムも作ろうとしているし、石木ダムもゴリ押しでやろうとしているじゃないですか。そういうことをやっている組織が本当の意味での流域治水なんかできるわけないんです。これが、私の今の実感です。

嘉田：山川草木悉皆成仏は、私は中学校3年生のときに比叡山延暦寺で触れて、それで琵琶湖に来た原点の思想ですので、ぜひ大熊イズムを広げていきたい。また、もともと基本的に文化人類学者ですから、世界中の水と人間の関わりを見て来たときに、日本の国土の中で数千年・数万年、縄文弥生時代から洪水も災害も共に生きてきたわけですから、その哲学に戻るべきだというのは原点です。それをどうやって子孫に、若い人に伝え、そして国中に広げていくかということだろうと思います。そこも含めて議連では勉強会がしたいと思っております。それをこの12月くらいに始めたいということです。

[機器都合により、ここで録画中断]